

創立 5 周年記念 盛大に祝賀会開催!!



多彩な来賓を迎えて Ein Prosit 乾杯!

昨年11月で湘南日独協会は創立5周年を迎えました。これを記念して12月20日午後4時より特別例会として名作バレエ「くるみ割り人形」の公演が藤沢市民会館大ホールで開催されました。チケットは1週間前に1200席完売となり、参加の皆さんは乃羽バレエ団の見事な演技と湘南エールアンサンブル、合唱団アムゼルの熱演に感動しました。

バレエ公演終了後、会場を移して午後6時より藤沢市民会館第1展示集会ホールにおいて湘南日独協会創立5周年記念祝賀会が開催されました。当日は駐日ドイツ大使代理、藤沢市長、鎌倉市長、茅ヶ崎市長、茅ヶ崎商工会議所会頭、佐藤美智子氏(代理)、渡利春夫氏らの臨席を頂き、賑やかに祝賀会が催されました。

宮下啓三 風景画展

— 私の出会った風景と人たち —

日時 平成16年3月3日(水)～9日(火)

(最終日は午後5時で終了)

会場 藤沢小田急6階=ギャラリー

湘南日独協会 2004 年度活動予定

どうぞ今からご予約下さい。

■ 2月28日(土) 会員懇話会 18:00～

会場 ホテル法華クラブ藤沢 2F ローズルーム

■ 3月27日(土) 第32回例会

会場 ホテル法華クラブ藤沢 2F ロータスホール

■ 4月24日(土) 会員懇話会 18:00～

会場 ホテル法華クラブ藤沢 2F ローズルーム

■ 5月22日(土) 第33回例会

会場 ホテル法華クラブ藤沢 2F ロータスホール

■ 6月26日(土) 会員懇話会 18:00～

会場 ホテル法華クラブ藤沢 2F ローズルーム

■ 7月31日(土) 第34回例会 18:00～

湘南の夏を彩るビアイベント

ドイツフェア

出演 楽団「シバルベ」

湘南日独協会混声合唱団「アムゼル」

会場 藤沢市民会館第1レセプションホール

■ 8月28日(土) 会員懇話会 18:00～

会場 ホテル法華クラブ藤沢 2F ローズルーム

■ 9月25日(土) 第35回例会

会場 ホテル法華クラブ藤沢 2F ロータスホール

■ 10月23日(土) 会員懇話会 18:00～

会場 ホテル法華クラブ藤沢 2F ローズルーム

湘南日独協会会報 (Der Wind)

VOL 6. NO. 1. 通巻31. 発行 2004.1.24.

湘南日独協会

Japanisch-Deutsche Gesellschaft in Shonan

事務局: 〒251-0055 藤沢市南藤沢8-9 中丸ビル2F

TEL0466-26-3028 / FAX0466-27-5091

No. 31.

湘南日独協会 会報

Der Wind

(風)

湘南日独協会 第31回例会

【講演会】

モーツァルトを聞いて

… 健康になる秘密

日時 1月24日(土)午後1時30分～3時30分

講師 中島良能氏(指揮者。湘南エールアンサンブル音楽監督。ルーマニア国立バカウフィル客演指揮者。江ノ電沿線新聞社音楽講座講師。湘南日独協会理事。)

会場 ホテル法華クラブ藤沢 2F ロータスホール

講師からのメッセージ

音楽と健康の関係が最近注目されていますが、中でもモーツァルトが他の作曲家に比べて良いといわれるのは、単なる俗説ではなく、ちゃんとした根拠があります。自らの体験に基づいて、CDによる曲の解説と共に説明します。



『Glueck Auf 会』会員とドイツ大使館にて歌う !!

の
と
能登 崇
会員

去る6月24日、我々デュッセルドルフ男声合唱団は、ドイツ大使館主催の恒例園遊会に招待され、ライン河メドレーなど5～6曲を歌うという光栄に浴することが出た。このデュッセルドルフ男声合唱団（以下D合唱団と呼ぶ）というのは、かつてドイツはデュッセルドルフを中心に駐在・勤務していた日本人ビジネスマン達が、1991年設立した合唱団である。実は昨年5月の湘南日独協会の例会で、江の島で歌ったグループがこのD合唱団で、例会に出席された方はお聴きになったことと思う。

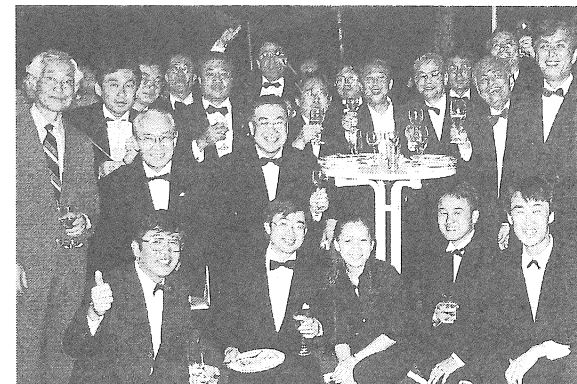
今回は、D合唱団としても初の挑戦となった、日独の掛け橋の一つとも言える様な小曲をご紹介したい。本番の二週間前になり、日独協会より大使館を通じて「是非園遊会のプログラムに加えて欲しい」と依頼されたのが標題の“Glueck auf”（グリュック アウフ）の歌詞ではじまる、日本風に表現すれば炭坑節とでも言えそうな“Das Bergmannslied（炭坑夫の歌）”である。“Glueck auf”は、辞書には、「無事でな！（坑内へ降りる時の挨拶）」とあり、我々の入手したドイツ語歌詞は4番までであるが、内容は比較的単純で、坑内の明かりや岩石から金銀を掘り出す描写、挨拶を交わしながら家で待つ奥さんの元へ帰る様子などが歌われる。実際に歌ってみると、マーチ風の軽やかなメロディーの中に、元気溢れる力強さを感じずが、実はこの曲を元気に歌いながら、3年間のドイツ派遣生活を送った数百名の日本炭鉱技術者達がいたのである。

今を去る50年前の昭和31年、ボンで日本人炭鉱労働者のルール炭鉱就労に関する、日独政府間の派遣協定が締結された。この協定に基づき「坑内経験3年以上の21～30歳までの独身鉱員」500名の派遣が決定され、三井鉱山、北炭、住友などから派遣鉱員が選抜された。そして昭和32年第一陣

が羽田発南廻りのデュッセルドルフ直行チャーター便で渡独した。さらに翌年にも第二陣、三陣と続き、結局渡独した実人員は436名に及んだ。

当時の日本は西独炭鉱の最先端技術を習得させ同国労働力緩和に寄与し、併せて日独親善の実を挙げることを目的とする事業計画を、両国の政・労・使三者協力の下に実現させたのである。後年「空前絶後の炭鉱夫派遣」と言われた所以である。しかしながら、当時は現代と違って海外渡航は夢のまた夢の話しであった。従って各社の選抜試験や選考をパスするには相当の難関を突破しなければならなかったが、それゆえ若くて優秀な炭鉱マン達は、遙か海外への大きな希望を抱いて、この派遣計画に挑戦した。高卒以上の学歴があつて、常識や炭坑実務に関するペーパーテストに合格しなければならぬことは勿論、身長・体重など容姿にも厳しい注文がついた。

昭和32年、十日間の講習を終えた59名の第一陣日本鉱山男は羽田を出発、50時間をかけてデュッセルドルフへ到着、戦災の跡の残るルール工業地帯はデュイスブルク州、ハンボルンに入る。旅装を解いたその夜の歓迎会で、まだドイツ語は不自由であつたが三井鉱山出身のI氏が「我々はハンボルンの炭坑に働きに来た」と英語で話すと、それがすぐに伝わって、ドイツの炭坑節「グリュックアウフ」の大合唱となったそうである。酒と歌と来れば、我がD合唱団は言うに及ばず、日独親善の目的を叩き込まれた炭坑夫は、早速知り合ったドイツ家庭に泊り込んだり、中にはサインを求めに来た乙女と不自由な筆談でデートの約束を取り付けたスマートなヤマ男もいた。初の海外生活の経験は、見る物聞く物全てが勉強であつたが、生活の知恵はここでも威力を発揮した。「スパゲティでう



デュッセルドルフ男声合唱団

どんを作ったり、卵焼きを揚げて油揚げを作る、魚は公園に生えているわさびで刺身を楽しんだ」と言う。地元との交流や、休日を利用した旅行など余暇を十二分に活用し、現地生活に溶け込む努力をするなどドイツでの青春を謳歌した。仕事は坑内労働も厳しいものであつたが、弱音をばく炭鉱マンはいなかった。それどころか折角の機会ということで、もともと派遣マンは特に優秀で評価も高かつたのであるが、こうして研修駐在と国際親善の二つの目的を持ってドイツへ渡った総勢436名の日本炭鉱マンのうち、ドイツ人女性との結婚などで32名が現地へ残留、7名がカナダの鉱山へ赴任した。その後帰国したこのドイツでの苦楽を共にした炭鉱マンは、昭和49年「グリュックアウフ会」を結成、その間昭和51年（1976年）に再訪独し、また日本各地の地区大会を開催するなどの交流が続いている。このたびのドイツ大使館園遊会で、D合唱団と共にこの「グリュックアウフ」の歌を合唱した同会員の明るい笑顔のなかには、海外渡航の先駆者として、厳しくても日本では経験の出来なかった、貴重かつ胸をしめつけられるような日独の仲間たちへの懐かしい熱き思いがこめられていたことであろう。（参考資料：北炭記念誌、深田祐介著「われら海を渡る」、読売ウイークリーなど）